

技が輝く

「宮島焼」の生まれた背景には、土地の風習が深く影響しています。昔の旅人は、厳島神社御神殿の下を道中安全の護符としていただき、無事に帰郷すると、その砂をほかの砂と混ぜて倍の量にしてから返していたと言います。そのような神聖な「お砂」を混ぜて、大祭用の祭器を作ったものが宮島焼、別名「お砂焼」と称され、現在まで継承されて



山根対厳堂

川原厳栄堂



ています。厳島神社の御用窯の一つである「山根対厳堂」は、初代山根興哉氏が一九二二（大正元）年に築窯しました。興哉氏は、京焼最高峰の窯元である宝山に抜擢されましたが、故郷で創作活動をするを選び、伝

広島県

宮島焼

統の宮島焼の技法に京焼・萩焼の良さを加えた独自の宮島焼を追求しました。

現在、入れる砂の粒の大きさは六種類もあり、作る品物によって使い分けながら質感の違いを出しています。宮島のもみじの葉（七枚葉のものに限る）を集めて、茶碗に張り付けた陶器も作られています。

初代が培った精神は、二代興哉氏、現在三代目を継ぐ息子さんへと脈々と受け継がれ、伝統の技を大切に守りながらも、芸術性の高いオリジナリティを加味した作品づくりが追求されています。

山根対厳堂と同じく厳島神社の御用窯である「川原厳栄堂」の初代川原陶斎氏は、宮島焼が明治時代に再興したときの立役者です。京都で修業した後、一九〇九（明治四十二）年にこの地に築窯し、以来、宮島焼



指先だけで軽く触れながらろろを回す

を守り続けています。

現在は、三代陶斎氏が店主として普段使いの日用品を中心に作っていますが、同じものが回る大量生産品とは一味違い、陶器の多様性が味わえるところが自慢です。新しい商品が絶え間なく出現する今、普段使いの伝統工芸品で商売するのは簡単ではありません。しかし、時代のニーズに合った商品コンセプトを宮島焼に取り入れ、よく売れる宮島焼を多く生み出し店を存続させることが使命だと信じ、三代陶斎氏は宮島焼を守り続けています。

お問い合わせ

広島県商工労働局経営支援課
TEL 〇八二一五一一三三三二八
FAX 〇八二一一二二二二二二二二七
E-mail syokeiei@pref.hiroshima.
lg.jp